

# Discovery Base

ディスカバリーベース

「大学のあるまち京田辺」が  
子どもたちのためにできること。



## 特集

- 京田辺市長×学生対談「大学のあるまち」京田辺の描く未来とは
- 大学との連携研究事業「ポストコロナ社会を見据えた市民生活の向上について」研究者紹介
- 読者アンケート・プレゼント企画!!

# 「大学のあるまち」京田辺の描く未来とは



柿田 知輝さん  
同志社大学  
政策学部 3年次生

森山 花菜さん  
同志社女子大学  
看護学部 1年次生

松野 光沙さん  
同志社大学  
政策学部 3年次生

奥村 可蓮さん  
同志社大学  
政策学部 3年次生

京田辺市長…上村 崇  
かみむら たかし  
1995年3月に同志社大学法学部政治学科を卒業し1998年には同大学大学院総合政策科学研究科修士課程を修了。京田辺市議会議員、京都府議会議員を経て2019年に京田辺市長に就任。

## きょうたなべ魅力研究所と上村市長=京田辺市役所前

同志社大学 政策学部 真山 達志 教授ゼミと同志社女子大学まちづくり委員会の学生で構成する「きょうたなべ魅力研究所」が上村市長と京田辺市の魅力や大学と連携したまちづくり、また令和3年3月に市が設置した「京田辺市大学連携ディスカバリーベース」について対談を行いました。

市=上村市長 魅=きょうたなべ魅力研究所

## 「きょうたなべ魅力研究所」の立ちあげ

市： どういう経緯で真山ゼミとまちづくり委員会が協力することになったのですか？

魅： 「全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺」(※1)に双方のチームが参加していたことが一番のきっかけになりました。まちづくり委員会の政策提言は考え込まれていて印象に残っており、真山ゼミのメンバーで実際に同志社女子大学に直接伺って協力をお願いしました。今は、私たちが京田辺の魅力だと感じることを学生など若い世代に向けて発信する広報誌「きょうたなべ魅力研究所」を作成して、毎月発行しています。

## 学生からみた京田辺

市： 学生の皆さんからみた京田辺の印象を教えてください。

魅： 政策学部は今出川校地で学ぶことから、京田辺に来る機会は入学式の時しかありません。そういった中での感想は、「大学のあるまちだな」という印象でした。特に夕方は駅前が学生でにぎわっている感じです。飲食店も多いなと感じます。新田辺駅は急行も停まる駅なので交通のアクセスも良いんだなと思いました。ただ、学生や若者が遊びに行く場所という点では気になりました。交通の便が良いので、何か目的があれば人が来るのではないかと思います。

市： 京田辺らしい風景が見られたり、市民・学生が交流できるサー

ドプレイス(※2)など、魅力的な場所が必要だと思います。

## 読む人にも京田辺を好きになって欲しい

市： 広報誌の作成にあたり、これまで縁のなかった京田辺を調査する中で、このまちをどのように感じていますか？

魅： 京田辺はやはり豊かな緑が印象的で、自然に触れられるところが良いなと思っています。自然の中で過ごすカフェなどに惹かれます。すごく人が優しいのも特徴です。私は京田辺に住んでいませんが、取材を通して本当に京田辺が好きになりました。この思いを私たちが作成している広報誌を読む人たちに伝えたいです。

市： 市内には、企業や市民団体など様々なところで頑張っている人たちがたくさんいます。それらを学生の皆さんの力で広めてくれるような活動をして欲しいと思います。



※1 毎年2月下旬～3月上旬に開催。全国の大学生や大学院生がチームを構成し本市に集い、まちを調査し、政策提言を行う  
※2 自宅や職場、学校とは異なる心地よい第3の場所

## 「大学のあるまち」京田辺の魅力

魅：「大学のあるまち」京田辺の魅力を教えてください。

市：一番大きいのは「学生がいる」ということです。大学がないまちだと大学に通うためや就職で学生の年代の人口が大幅に落ち込みますが、京田辺では増加します。自分の好きなことにチャレンジできる年代がいてくれることは、まちに活気をもたらしてくれます。これが一番京田辺にとっての魅力になっていると思います。様々な地域にルーツをもった学生が来てくれることも大きいです。それぞれが京田辺のことを覚えていてくれて、感じたことや学んだことをそれぞれの地域で発信してくれたら良いと思います。

## これまでの大学連携と課題



魅：これまで大学とはどのような連携を行ってききましたか？

市：京田辺に同志社のキャンパスができたのが1986年で、2005年に同志社大学と同志社女子大学、同志社国際中学校・高等学校で地域包括協定を結びました。その後、京田辺キャンパスの特徴を生かした同志社大学体育会クラブスポーツコミュニケーションや同志社大学サイエンスアカデミー等の開催、学生による市のイベントでの司会、大学教員の市の審議会への参画などの取組をしてきました。このように、様々な場面で大学が地域に関わってくれることは大変ありがたいと思います。それらの連携を通して「より市民に身近で実践的な取り組みを行いたい」という考えから、令和3年3月に京田辺市大学連携ディスカバリーベース(DB)を設置しました。連携の主体を「行政と大学」から「地域と大学」へと発展させることが目的です。

## 大学と連携したまちづくり

魅：市と大学が連携してまちづくりに取り組む意義を教えてください。

市：京田辺市を大学教員の研究や学生の活動のフィールドとして活用してもらうことは、まちの価値を高めることにつながります。これからの時代は、このまちに住む市民の満足度を高めることが大切です。市民に「ここに住んで良かった」と思ってもらえることが、次のまちづくりにもつながっていきます。そのために大学があるということは大きな要素だと思います。

魅：大学との連携を活かしたまちづくりの目標を教えてください。

市：フィールドワーク等でもっと大学の教員や学生に京田辺市を活用してもらい、大学と地域がつながることです。地域では様々な課題が出てきます。大学の教員や学生が関わってくれることで解決できるかもしれません。また、学生の皆さんも身近な地域でフィールドワークを行うことで、より実践的な学びにつながるのではないかと思います。学生の皆さんにとってもプラスになることが大切です。

## ディスカバリーベース(DB)をハブに

魅：新たに設置されたDBがどういった役割を持ち、どのような課題を解決できるのかを教えてください。

市：DBの取り組みの1つとして「京田辺市研究ニーズバンク」をスタートしました。区・自治会や市民団体等からニーズを吸い上げて、課題解決に関わってもらえる大学の教員とマッチングしたいと考えています。そのためのハブのような役割をDBが果たせば良いと思います。学生の皆さんには、様々なことに好奇心を持ってチャレンジしてほしいです。その好奇心のアンテナに京田辺の取り組みが引っかかって、実際の活動へとつなげてもらいたいと思っています。DBを通してたくさんの方に関わってもらえることを期待しています。



## 京田辺のファンになって発信して欲しい

魅：大学や学生に期待していることを教えてください。

市：学生の本分は大学で学ぶことですが、学生時代にしかできないこともあります。これから大学での学びは変わり、学生も教員も拘束時間が短くなるのではないかと思います。大学には、学生が社会に出て力を発揮できるような主体的な取り組みを推進してほしいです。そのためには、ゼミやサークル活動といった授業以外の活動を支援して、社会につながる階段を少しずつ作っていくことが大切だと思います。そして、大学と学生、行政、地域が新たな形で関わっていく必要があります。何よりもまずは関わってもらうことが大切です。何かのきっかけで京田辺を知ることになった、関わることになった皆さんが京田辺のファンになって発信してもらうことは、京田辺市民の誇りにつながると思います。

## 京田辺市大学連携ディスカバリーベースって？

大学教員や学生が行う市内での活動を円滑にし、大学の豊富な知識、技術、人材の教育現場や地域での活用を促進することで、「大学のあるまち」としての本市の魅力を高めていくため、令和3年3月に市に設置した機関です。主に大学教員への地域課題の研究委託、小・中学校等と大学教員・学生の活動とのマッチング、大学連携事業の情報発信などの活動を行います。このロゴは、同志社大学漫画研究会が作成しました。



## 《対談後記》きょうたなべ魅力研究所 上村市長の人となりに触れた時間でした

●「市長」との対談ということで最初はとても緊張しましたが、話しやすい雰囲気を作ってください、リラックスすることができました。自分の意見を押し通すのではなく、私たちの意見についても否定せずに頷いて聞き、その上で自分の考えをおっしゃっていたことがとても印象的でした。(同志社大学政策学部 真山ゼミ 柿田)

●上村市長はとても気さくな方で、楽しんで対談させていただきました。常に市民の立場に立って京田辺の現在や将来のことをよく考えておられる印象を受けました。職員さん同士の雰囲気も良くアットホームな職場でした。(同志社女子大学まちづくり委員会 森山)



きょうたなべ魅力研究所の広報誌はこちら





# 大学との連携研究事業「ポストコロナ

## 京田辺市、同志社大学・同志社女子大学連携研究事業

京田辺市では2005年に同志社大学、同志社女子大学（以下「連携大学」）と連携協力に関する協定を締結し、連携大学の有する豊富な知識、技術、人材を活用したまちづくりを進めています。

その一つとして、京田辺市の行政・地域課題の解決や地域資源の掘り起こしに繋げるために、連携大学の研究者に研究の委託を行う「令和3年度京田辺市、同志社大学・同志社女子大学連携研究事業」を実施しています。

今年度、京田辺市をフィールドに「ポストコロナ社会を見据えた市民生活の向上について」をテーマに研究に取り組む研究者3名にお話を伺いました。



## 研究者紹介



須藤 潤 准教授

1976年、北海道生まれ。同志社大学 グローバル・コミュニケーション学部 グローバル・コミュニケーション学科。専門は音声コミュニケーション、日本語教育学。家庭では二児の父親。「時々散歩しながら子どもたちと空を見上げて旅客機を観察したり、空港まで出かけて旅客機の写真を撮るのが楽しみです。」



野田 遊 教授

1973年、大阪府生まれ。同志社大学 政策学部 政策学科、専門は地方自治論。最近では「研究だけでなく、学生の政策コンペの参加にも力を入れています。2021年には内閣府主催の政策アイデアコンテストで入賞しました。」



竹田 正樹 教授

1966年、新潟県生まれ。同志社大学 スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科、専門は運動とエネルギー代謝及び身体トレーニングがエネルギー代謝に及ぼす影響、スポーツ生理学。元クロスカントリースキー選手、国体代表。最近では「ゴルフとテニスにはまり、スキーと併せて私の3大スポーツになっています。」

同志社大学 グローバル・コミュニケーション学部

須藤 潤 准教授

「住民にやさしい情報発信のあり方とは?-外国人住民の目線から公共の文書・サインを考える」



## どのような研究をしていますか？

ホームページや看板といった生活の中にあるサインを様々な言語圏の人にとってより分かりやすいものにするための研究です。外国人が日本で生活している中で感じている不便や不自由を明らかにしようとしています。

## 研究の目的

コロナ禍が落ち着けば様々な国の人が日本に戻ってくることが予想されます。京田辺市も例外ではありません。より住みやすいまちになるように、言葉の面からサポートすることができると思います。特に行政から発信される情報を外国人が正しく受け取り行動することができるようにしたいと思っています。

## 市民へのメッセージ

ここ10年でまちの中でも外国人を多く見かけるようになってきました。これからも日本で生活する外国人は増えると思います。しかし彼らも同じ住民の1人なので気負わずに日本語で話しかけてほしいと思います。日本が好きで日本語がある程度わかる人ばかりです。だから是非日本語であいさつなどをしてほしいです。交流があることは、災害時に互いに安否が確かめられるなど地域防災の点からもとても重要です。



# 社会を見据えた市民生活の向上について

同志社大学 政策学部

野田 遊 教授

COVID-19感染リスク下における京田辺市と京都府の効果的な連携に関する研究

## どのような研究をしていますか？

コロナ禍における京都府と京田辺市の関係性の変化についての研究です。コロナ禍という緊急事態における組織の連携の実情が理解できるのではないかと考えています。緊急時の情報の伝え方についても調べています。

## これまでの緊急事態との違い



大抵の防災については、前例やハザードマップの情報などを駆使して、ある程度の対応方針を決めることができます。その自治体で十分に情報がない場合は、他の自治体から情報収集することで方向性を探ることもできます。しかし、コロナ禍は今までの前例がありませんでした。それまでの緊急事態と違い、未知を既知にすることから始める必要がありました。

## この研究がどのように役立つのか

まず都道府県と市町村の連携は重要です。なぜなら市民は両方に税金を支払っているからです。市と府の両方に、自分の権利とお金を信託しています。だから都道府県と市町村が連携しないでサービスを提供するというのは不合理なことです。その連携をより良くするために役立つと思います。

## 市民へのメッセージ

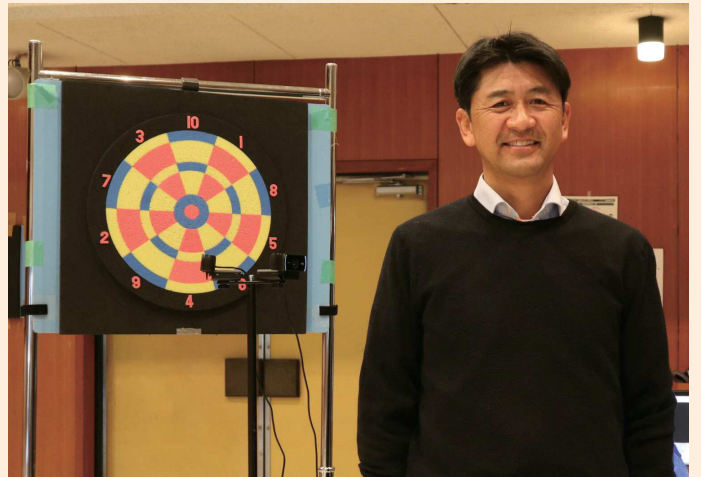
市民は行政が何をしているのかがあまりわからないと思います。だからこそ行政は市民に対してどのような取り組みを行い、どういった成果が出たのかを伝える必要があります。そういった情報の伝達に役立つ研究になれば良いと思います。



同志社大学 スポーツ健康科学部

竹田 正樹 教授

密集を防ぎつつ人と人をつなぐ「集団オンラインウエルネスダーツ対戦システム」の構築



## どのような研究をしていますか？

ダーツの競技を遠隔で様々な会場で同時に行うための研究です。現在はコロナ禍で1つの会場に大多数の人が集まませんが、会場を分散すれば各会場に少人数で集まって競技を行うことができます。人と人が集まる社会参加を促すことで、身体的機能の低下や精神の悪循環を断ち切ることができると思っています。

## なぜダーツだったのか

ダーツは割り算以外の計算を全て使う競技で、特に引き算を使う競技は珍しいです。身体も脳も使う競技は機能の衰えを予防する効果もあります。コロナ収束後もこういった競技を行うことは地域にとってプラスになると思います。



## 現在の課題

通信環境や音声処理、カメラの画質の問題などがあります。多くの会場をオンラインでつなぐ必要があり、機材の費用がかかります。高齢者が競技を行う場合、点数の入力や機材の設置が難しいということもあります。

## 研究の思い

オンライン開催が実現すればコロナ収束後も役に立ちます。そのためにより早く課題を解決して、京田辺モデルを構築したいです。せっかく大学が京田辺にあって地域と関わりを持っているので研究成果を市民の皆さんにお返ししたいです。それが自分にとっても充実した生活につながります。

# 飛べ!未来を担う京田辺の子どもたち

## ～地域と大学をつなぐ取り組み～

京田辺市大学連携ディスカバリーベースでは、地域と大学をつなぎ、子どもたちの学びの充実を図る様々な取り組み等を推進しています。それら年間100件を超える事業の中から一部をご紹介します。

### 音楽によるアウトリーチ



(児童) いつも普通に聴いている音楽を楽器の生演奏で聴いてすごいと思った!

(児童) 演奏する時に気を付けていることは?

(学生) 『音楽』という漢字は『学』ではなく『楽』と書くように、まずは自分が音楽を楽しむことを大切にしているよ!



小学校の音楽の授業において、児童が楽器の仕組みや音色、音楽の楽しさについて学習することを目的とした、同志社女子大学 学芸学部 音楽学科3年次生による参加型の音楽公演(音楽によるアウトリーチ活動)を実施しています。(担当:同志社女子大学 学芸学部 音楽学科 椎名 亮輔 教授)

### 小学校における国際理解学習

小学生が同志社女子大学 現代社会学部 現代子ども学科3年次生によるSDGs出前授業『プラスチックごみの問題から、より良い社会のアイデアを考える』に取り組みました。

授業には、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部の外国人留学生も加わり、児童は留学生と一緒に「ゴミ問題を解決するためのアイデア」を考えました。(担当:同志社女子大学 現代社会学部 現代子ども学科 藤原 孝章 特任教授)



(児童) 1年生のプラスチックの筆箱をリサイクルして布製の筆箱に作り替える!

(留学生) 中国では「ゴミ袋製造制限」があるよ!

(留学生) 韓国では「容器持参型の買い物」の取り組みがあるよ!



# 同志社大学サイエンスアカデミー



京田辺市の小・中学生を対象に、同志社大学 理工学部の教員による理科の実験教室を実施しています。同志社大学 京田辺キャンパスは、理工学部を中心に理系学部の拠点として立地されており、本市ではその特徴を活かして同大学と共催で、子どもたちに理科への興味・関心を高めるきっかけづくりを行っています。



(児童) 見たことのない虫をたくさん見て触ることができた！

(保護者) 「小さい子でも分かりやすかった」「大人も勉強になりました」「内容がシンプルで安全性も高く、子どもが楽しんでいて良かった」

(児童) スライムにラメを入れて作るのがキレイで一番楽しかった！



(児童) グループの仲間と協力できて楽しかった！



令和2年度から小学校でプログラミング教育が開始されたことに伴い、小学生が理科の授業「電気で明かりをつけよう」の単位において、同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科の学生らのサポートを受けながら、プログラミング学習に取り組みました。児童は、電気回路の仕組みを用いてプログラミングツール“micro:bit(マイクロビット)”を光らせ、グループごとにクラスの良さを表現する光のモニュメントを作成しました。(担当:同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科 日下 菜穂子 教授)

(児童) 違う場所にいる人ともオンラインで一緒に取り組めることが分かった！



## プログラミング教育

中学生が家庭科の授業において、自分自身の食習慣を見直し、改善できる能力を身に付けることを目的とした、同志社女子大学 生活科学部 食物栄養科学科 小切間美保 教授による食育講習『Eat right, Be bright ー良い食べ方は、あなたを輝かせるー』を受講しました。現在、田辺中学校は小切間教授の研究室 管理栄養士専攻の学生と共同で「中学生の調理経験と食事観、自尊感情との関連性の研究」に取り組んでいます。

## 中学校における食育



(生徒) 『食べる』ということが、人間の能力につながっていることが分かった。大昔からの人々の『食べる』という営みを、自分も意識していきたい！



# 京田辺市研究ニーズバンク

市内で活動する団体、事業者の皆様!  
大学に研究して欲しいテーマを募集しています!

市では、市内で活動する団体等が活動の中で抱えている地域課題や市の抱える行政課題を大学の研究者に「研究してもらいたいテーマ」として取りまとめ、市ホームページ等で公表する「京田辺市研究ニーズバンク」を実施します。

この取り組みは、本市が連携に関する協定を締結している同志社大学・同志社女子大学をはじめ、様々な大学の研究者が皆さんから頂いたテーマに沿って、本市を研究フィールドとした調査・研究活動を行い、今後の団体等や行政の課題解決に資することを目的としています。

現在、市内で活動する団体、事業者の皆様が大学の研究者に「研究してもらいたいテーマ」を随時募集しています。お寄せ頂いたテーマは、各大学にお知らせし、研究者の検討資料とします。応募方法などの詳細は、市ホームページをご確認ください!

<http://www.kyotanabe.jp/0000016720.html>

市ホームページのQRコードはこちら▶



## 読者アンケート・プレゼント企画!!

より良い誌面作りのため、情報誌の内容や大学との連携についてのアンケートにご協力をお願いします。

回答者の中から抽選で3名に大学関連グッズをプレゼントします。当選は2月頃にグッズの発送をもってかえさせていただきます。グッズはお選びいただけませんので、ご了承ください。応募は1人1回に限ります。

回答締め切り=令和4年1月16日(日)



アンケートQRコードはこちら!!  
URLからもご応募いただけます。

<https://logoform.jp/form/N5DB/4504>



### グッズはこちらの3点!!

◀同志社大学オリジナルグッズ  
スウェットパーカー



▲同志社女子大学  
まちづくり委員会  
×都茶寮  
フレーバーティー  
(thé to thé KYOTO  
ボトル付き)



▲同志社大学オリジナルグッズ  
本革ファスナーペンケース

### 誌面の作成に協力してくれた同志社学生新聞局からのメッセージ

私たち同志社学生新聞局は、年に4回程度、主に学外団体や卒業生の取材、地域のニュースを取り上げた同志社学生新聞を発行しています。今回、京田辺市から依頼を受けた情報誌というジャンルでの取材・編集は、局として初めての取り組みでした。上村市長と学生の対談では、市長の考えや理念を直接伺うことができ貴重な経験になりました。今回の経験を同志社学生新聞にも活かしていきたいです。

(同志社学生新聞局 局長 岡本 倫奈)



同志社学生新聞局QRコード▶